

◆書評◆

キム・ジへ著／尹怡景訳

『差別はたいてい悪意のない人がする』

見えない排除に気づくための10章』

(大月書店 2021年 ISBN 978-4-272-33103-1 1600円+税)



梁・永山 聡子

(成城大学 グローカル研究センター)

本書(キム・ジへ著／尹怡景訳『差別はたいてい悪意のない人がする』)は、2018年韓国で16万部以上のベストセラーとなった『善良な差別主義者の誕生(선량한 차별주의자)』の日本語訳だ。評者は編集協力者として、翻訳者、編集者と共に、翻訳の検討、脚注の検討・執筆、そして日本版の書名の検討を行った。日本版のみに、韓国の市民運動と政治を専門とする金美珍(キム・ミジン)氏の解説がある。したがって、現代韓国社会がどのように差別と闘っているのか理解できる1冊だ。同時に、韓国の問題で終わらせずに、日本社会にも同様の問題群があることを理解できる内容だ。2021年8月の刊行後、アカデミア、市民社会、マスメディアを問わず大きな反響があった。読者を優しく包み込むような翻訳も手伝って、「自分の問題／日本の問題として考えたい」と受け止める人が多いのか、2022年5月現在7刷／20,000部まで版を重ねることができ

ている。

著者のキム・ジへ(金知慧)氏は、江陵原州大学で多文化共生などを研究する差別問題の専門家である。大学時代は障害者差別をなくす取り組みをするサークルで活動、社会福祉学で学位取得後、児童青年相談所勤務を経て、福祉系の大学の教員になった。しかし、安定した教員の職を辞して、実践的な差別解消を目指し、アメリカのロースクールに留学。その後、韓国憲法裁判所憲法研究員になり、南アフリカの憲法裁判所判事でセクシュアル・マイノリティ／HIV患者であったエドウィン・キャメロン(Edwin Cameron)の*Justice: A Personal Account*を翻訳するなど、一貫してマイノリティ差別をなくす研究・活動を精力的に行っている。そのような輝かしい経歴の人でさえ、気が付かない差別をしてしまったことから本書は始まる。著者は講演会で、物事を決められないことを「決定障害」と発言。参加者

から、なぜ障害という言葉を使用したのか？と指摘される(3頁)。この記述は、本書を貫く、差別は気持ちの問題ではなく、個人の努力で防げるものでもない、差別を作り出し・温存し、強化する社会構造を問わなければならないという、問題意識を鮮明にしている。

本書は3部10章構成である。「I 善良な差別主義者の誕生」では、学術研究や差別解消の社会運動を行っているものであれば、必ずぶつかる問題について書かれている。マイノリティがマジョリティに対して正当な権利要求をしている過程で、いつのまにかマイノリティ同士、どちらがどのくらい不当な権利状況にあるのか、どちらが先に権利を獲得すべきか、などといった不幸の争い問題がある。本書では、なぜ陥るのかについて、マジョリティ側の問題がマイノリティ側の問題にすり替わっているメカニズムを明らかにする。この問題を理解し解消しない限り、マイノリティなど、差別される側の不毛な争いが継続し、疲弊してしまい、結局マジョリティの都合のよい社会が継続していくのである。その上で評者は本書を読み進めるにあたり、差別解消について、マジョリティ目線の再配分の問題に留まっている議論に風穴をあげ、マジョリティ側が求めるマジョリティが作りあげた規範を解体することを解題としていると考える。「わたしたちはつねにひとつの場所に立っているわけではな」(46頁)く、多

重的地位の複合体であることを知り、差別解消は一つのマイノリティへ差別だけを解消しても解決できないために、交差性を語る。

次に、マジョリティ側の視線や特権が差別を不可視化するメカニズムについて、「II 差別はどうやって不可視化されるのか」で明らかにしている。特に第4章は、笑える権力／笑いと差別との関係性について、韓国のお笑い番組の中で行われた「ブラックフェイス」論争を中心に考察をしている。日本でも同様の問題が起きた際に、黒塗りをすることは人種差別であると問題視する人々に対して、SNSなどを中心に被害妄想などと差別として捉えない人々も多数いた。著者は、優越理論を用いて、「自分の立ち位置によって、同じシーンでもおもしろいときと、そうでないときがある。そのシーンから自分の優越性を感じる際にはおもしろいけど、逆に自分がけなされたと感じればおもしろくない」(92頁)と解く。自分が笑える場所にいる特権には気がつかず、あれはネタなのになぜ過剰反応するのかと差別告発を軽視し、「ユーモアには、タブー視された領域の封印を瞬時に解き放つ効果がある」(94頁)とする。一部の大衆メディアが放つ“笑えないことは、ユーモアのセンスがない”とするメッセージを想起させた。日本における、メディアを中心とした在日朝鮮人や外国人に対する蔑視は、同様の問題である。著者は「ひと

つ明らかな事実は、ユーモアの意味は社会的文脈によって変わるということだ」(91-92頁)と指摘し、お笑いを差別の問題として捉えることを提起している。

差別問題を取り扱う研究・書籍の多くは、告発にとどまるものが多いが、本書では「III 私たちは差別にどう向きあうか」においてさまざまな解法を提示している。もちろん、今までもたくさんの差別解消への取り組みはあるが、それを評価した上で、差別禁止法制定の重要性を説明する。日本と韓国の共通点は包括的な差別禁止法がないことだ。金美珍氏の解説「韓国における差別禁止の制度化とそのダイナミズム」も併せて読むことでさらに理解が深まり、日本の読者にとり、韓国の問題として切り捨てられない切迫性を理解することができるだろう。

著者は「差別の話は、たんに『社会的弱

者』あるいは『マイノリティ』と表象される特定の集団に限らない、私たちみんなの生活を構成する関係に関する話でもある。だから私はこの本で、さまざまな理由で差別をしたり、差別を受けたりする無数の関係のなかで、私たちの人生がどのように形成されるのかを振り返ろうとした」(224頁)とエピローグで書いている。この記述は、社会には、都合よく「わたしたち」と「あなたたち」を分断するメカニズムが、無数に広がっていることを意味している。「差別はなくさなくてはならない」と社会的合意をしない限り、そのメカニズムに絡めとられ、誰かを差別し、排除してしまっていることの恐ろしさにさえ気が付かないのである。本書を手がかりにしなが、日本社会の正義を真剣に考えなくてはならないだろう。